



# 「祝詞」を奏上する沖縄の御嶽と神祠 —「『帝国日本』境界の祭祀再編と海外神社」の視点で—

前田 孝和

(非文字資料研究センター 客員研究員)

## I 調査日程・目的

「『帝国日本』境界の祭祀再編と海外神社」班の筆者は、上記標題のもと、令和4年(2022)11月3日(旧暦10月10日)に沖縄県与那国町久部良の金刀比羅神社、11月10日に多良間村字仲筋の多良間神社(菅浩二客員研究員同行)、12月20日に本部町字新里の新里宮の各祭典と令和5年(2023)2月13日に宮古島市伊良部字長浜世乞の長浜ユークイ(長浜神社)の聞き取り調査を実施した。

調査の目的は、法人化されていない戦前から存在する沖縄の祭祀施設で、今なお「祝詞」が奏上されており、その「祝詞」、由緒、式次第などを調査することで、沖縄の伝統祭祀の中での祝詞奏上の位置づけ、御嶽の神社化との関係などを考察するためである。

## II 「御嶽の神社化」

琉球処分後、沖縄県は内地並に神社規則による神社、いわゆる公認神社の創立を計画した(私祭神祠は未公認神社という)。紆余曲折を経た最終的な方針は、御嶽・拝所を合併して一村一社化を目指し、合併の対象となった多くの御嶽・拝所は、「神社」となった末社に位置づけ、「沖縄県神社創立計画案<sup>1)</sup>」(昭和18年〔1943〕10月に内務省神祇院に提出)としてまとめられた。県下904の御嶽を合併・廃止して「独立神社」69社を設け(創立許可のみで未鎮座の伊是名神社と既存神社13社を含む。大東島を含む58市町村に創立)、その「末社」257社を創立するというものである。

御嶽・拝所である「のろくもい神社」を公認神社に引き直す(「御嶽の神社化」)申請は、明治34年(1901)には確認<sup>2)</sup>できる。ついで県社の建設及び御嶽・拝所を合併して村社建設を計画する「県社・村社建設理由書<sup>3)</sup>」を明治43年(1910)4月25日には作り上げている。しかし、県による「御嶽の神社化」は昭和18年(1943)の「沖縄県神社創立計画案」まで具体化せず、それに代わって町村や集落主導で御嶽・拝所に社殿、鳥居、燈籠が建てられる動きが顕著となるのは、早くは明治20年(1887)前後以降であろうか(鳥居の建立は明治以前にも見受けられる)。多くは質素、無許可であり、かつ境内地面積や社殿規模など創立条件を充たしてはいない。そのため沖縄県は、社寺に模した祭祀施設

の建設を禁止するため、沖縄県内務部長が大正6年(1917)9月6日付で八重山島司宛に「社寺仏堂等ニ模擬構造ニ関スル件依命通牒<sup>4)</sup>」を発した(県下に発出と思考)。それでも、社殿建設の流れを止めることはできず、各地で御嶽に社殿や鳥居が建てられる「模擬構造」の神社化が進んだ。それらの施設での祭祀は、旧来通り、ノロクモイが主導する伝統的な祭祀であった。結果的には、敗戦によって、「御嶽の神社化」は実現していないが、その理由は敗戦以外に、県民意識の統一、財政の確立などの課題や、神社化の具体的かつ詳細な方策が定まらなかったことに起因するのであろう。

それでも、神社として建設された多良間神社(多良間島)、御嶽に社殿が建てられた長浜ユークイ(長浜神社、伊良部島)、内地人が建立した金刀比羅宮(与那国島)、分村で鎮守を建立した新里宮(本部町)では、祭祀形態は沖縄の伝統的スタイルであったり、神社神道的であったりと相違はあるものの、戦前に引き続き「祝詞」が奏上されている(他にも祝詞奏上のケースがあるかもしれない。ご教授願いたい)。

本調査報告では、実態報告と「『帝国日本』境界の祭祀再編と海外神社」の視点で、若干の考察を試みたい。

## III 「多良間神社」調査報告

多良間神社が鎮座する多良間村は、宮古島と石垣島の間に位置し、それぞれ西方約67km、北東約35kmに位置しており、宮古島市平良からフェリーで約2時間の距離である。多良間神社の概容は次の通り。

神社名 多良間神社  
祭神 んたばるとう ぬみやしゅんげん  
土原豊見親 春源  
所在地 宮古郡多良間村字仲筋 483-1  
鎮座式 明治35年(1902)1月20日  
例祭日 11月10日

由緒 多良間小学校の瓦葺き校舎改築の折、15世紀末に島内を統一した祭神が植樹した神木とされるフクギ多数を使用した。計画推進者で校長の進藤栄(宮崎県出身)が、神木に勇断を奮って最初に斧を入れ、工事は事故もなく竣工した。校舎建設と無事故を祭神に感謝するため神社を造営、明治35年1月20日に鎮座式を斎行した(新校舎の開校式及び御真影奉戴式は前日の1月19日)。神座は御

鏡と神牌（「土原豊<sup>ママ</sup>視神座」と神名刻印）。



写真1 多良間神社正面

令和4年度の多良間神社祭は、11月10日午前九時、ツカシャ（女）、ニシャイガッサ（男）が取り仕切り、全村民の健康・繁盛、村外在住者の幸福、「三日越しの慈雨」、山の幸海の幸の豊作満作などを祈るツカシャの祈り（祈念）からはじまる。スーツ姿の村長が祝詞を奏上、そのあと村長、島内各御嶽のニシャイガッサ、小学六年・中学三年の代表をはじめ各代表が拝礼、祭神を称える「数え歌」「土原豊見親頌徳歌」を全員が歌う。終わって直会がある。コロナ禍中には祭典と小規模の直会があったが、令和4年次から奉納余興（三線と踊り）が再開された。また、1月1日には「多良間神社御宝前」に村民の健康、自然災害がなく万物豊穡の「御結願敬白 御立願敬白」が「多良間村役場 村民一同」によって捧げられる。

村長の祝詞は次の通りである<sup>注5</sup>。

祝詞

掛ケ巻クモ畏キ、多良間豊見親土原春源ト称エ奉ル、産土ノ大神ノ御前ニ恭シク申ス。昔、世ノ中ノ定カナラザリシ其ノ昔、多良間島三原村ヲ建テ、諸々ノ神祭ヲ始め給イテ人心ヲ修メ、山林ヲ樹エ農ヲ励マサレ、民心ヲ安ラケク平ケク育テ給イ、栄エシメ給



写真2 祝詞を奏上する村長と参列者の一部（多良間神社祭）

イシ御神徳ト、尚海外ニ有リテハ八重山島ヤ与那国島ノマツロワヌ者共ヲ討チ平ラゲ給イシ其ノ武勲ハ、普ク沖繩ノ隅々マデ聞エ輝サレシ、其ノ御神徳ヲ末永ク仰ギ奉ラント今日ノ生ク日足ル日ノ十一月十日ニ村民皆集イ詣テ拜ミ、尚千代万代マデ此ノ島ヲ護リ給イテ、栄シメ給エト畏ミ畏ミ申ス 村民一同

#### IV 「長浜ユークイ（長浜神社）」調査報告

長浜ユークイがある伊良部島は、宮古島市に含まれ、宮古島北西約5kmに位置し、平成27年（2015）1月31日宮古島と伊良部島を結ぶ伊良部大橋が完成、車での移動が可能となった。長浜ユークイの概容は次の通り。

名称 長浜<sup>世</sup>ユークイ（異称 腕山御嶽、長浜御嶽、長浜神社）  
 祭神 アカラトモガネ（比屋地の神）  
 所在地 宮古島市伊良部字長浜世乞354  
 創祀 1400年前後  
 祭日 旧暦9月戌申（伊良部地区ユークイの日）  
 由緒 昔（1370年頃）、久米島から兄弟神が来島、鍛冶をはじめ、弟神は比屋地の神となり、兄神は八重山の「おもと嶽の神」になったと伝える。赤良朝金は伊良部民が最も崇敬する神で、礼法や農業を指導し、伊良部元島の主長となった。死後（1400年前後）、住民はその徳を慕い比屋地に御嶽を建て、この地の守護神として祀った<sup>注6</sup>。



写真3 長浜ユークイ

伊良部村佐和田出身の国仲寛徒（明治6年〔1873〕生）は、祝詞などを勉強した「全身が神道で固り皇国精神の充満せる国土的風格<sup>注7</sup>」の人物で、地元の校長を経て初代伊良部村長に明治41年（1908）に就任（5期）、大正2年（1913）に佐和田世乞（高原御嶽、嵩平御嶽、大世主神社）に神殿建設、将来の村社昇格を考えていた（大正2年〔1913〕10月21日付「琉球新報<sup>注8</sup>」）。

大正4年（1915）、『伊良部村史』によると国仲村長の提唱で伊良部村に敬神会が結成され、村内の祭祀を掌るとある<sup>注9</sup>。一方、『国仲寛徒翁小伝』によると大正5



年に「各字の拝所を無格社村社に統一の理想を抱き村長自ら神事を行ふこととす<sup>注10</sup>」とある。大正4年(1915)もしくは同5年には、伊良部村内の各字で無格社・村社として創立する理想をもって国仲村長自ら「神事」をおこない、祝詞を奏上していた。柳田国男の大正10年(1921)1月31日の記録によると、「伊良部新神主村長国仲寛徒自らのりとをよむ。村民帰服せず、数年にして之をやめ。今は又元のツカサをして神を拝せしむ<sup>注11</sup>。」と、祝詞奏上を中止したとある。

しかし、長浜ユークイのみは祝詞奏上が継承され、今日でも長浜自治会の会長が祝詞を奏上している。その継続理由は不明である。祝詞が奏上されるユークイ(豊年祭)は、神役であるウタンマ、ナカンマ、ウツウシマを中心に旧暦9月の2日間(前夜祭、当日祭)おこなわれ、2日目午前9時頃の「当日祭」の最初に長浜自治会会長が祝詞を奏上し、ユークイがはじまる。会長奏上の祝詞は、以下のとおりである。

祝詞

か 掛けまくもかしこき 赤良朝金様の 犬前に 恐み 申す  
 あからともがね おおまえ かしこ 赤良朝金様の 成し 幸給える 八束穂 初穂 甘蔗御  
 いも こく み け み き つたえたてまつ ききしたま おおみよ  
 芋及五穀を御食御酒に仕奉りて 聞仕給えて 大代を  
 平良計久、安良計久、幸え給え 無病 息災 十日越  
 の夜雨を給えて 五穀実らせ 町内字内 豊年 萬作 毎年  
 来る 台風は 遠方 退散させ 海の世は 毎日 大漁 させて  
 下さるよう 赤良朝金様に 御願し 恵み 給え 撫で  
 給えと 恐み 毛須

コロナ禍で2年間中止を余儀なくされたが、令和4年度のユークイは、令和4年10月21日と22日に斎行された。



写真4 正面が長浜ユークイの社

## V 「金刀比羅神社」調査報告

金刀比羅神社が鎮座する与那国島は、日本の最西端、石垣島から約127km、台湾宜蘭県蘇澳まで約111kmで、国境の島と呼ばれている。石垣島からフェリーで約4時間30分の距離である。金刀比羅神社の概容は次の通り。

神社名 金刀比羅神社(金刀比羅宮)  
 祭神 大物主神、崇徳天皇(白峯大神)  
 所在地 八重山郡与那国町与那国ナーマ浜(久部良)  
 鎮座 昭和11年(1936)同10年との説も。  
 例祭日 旧暦10月10日  
 由緒 宮崎県目井津(日南市南郷町中村)生れの発田貞彦(両親が讃岐の屋島出身)が大正9年(1920)来島、漁業に従事、鯉節製造業で成功、鎮座前年に海難事故が多発、発田が無事故・豊漁を祈願のため讃岐の金刀比羅宮に出向き分霊(神札)を受けて、四国出身者が協力しナーマ浜に祠を建設、昭和11年(1936)、昭和10年との表記も)に祀ったのがはじまり。戦後、発田が鹿児島県山川に御神体と共に引き上げるが、仮の御神体で祭祀は継続、昭和53年(1978)に金刀比羅宮で御神体(神札)を受け、現在に至る<sup>注12</sup>。



写真5 金刀比羅宮(神棚が祀られ、魚、米、野菜、酒などが供えられる)

令和4年度の金刀比羅神社祭(与那国漁業組合主催)は、11月3日(旧暦10月10日)午前5時漁協事務所にて神官役の与那国町久部良中学校長、役員が集合、鉦太鼓とともに闇の中を神社に向かい、神饌を供えることからはじまった。開式前に久部良小学校からナーマ浜まで久部良小学校鼓笛隊が「祝 祈大漁安全 金刀比羅祭」の横幕を先頭に行進し参列。神官はナーマ浜の小丘鎮座する金刀比羅神社に伺候、参列者は階下の広場のテントに着席。午前9時祭典開始。式次第は、一同拝礼、開会のことば、修祓、招神の儀、御神酒献上(組合長献上)、祝詞奉読、玉串奉奠、昇神の儀、漁協組合長挨拶、来賓挨拶、今期漁獲高優秀者表彰、御神酒回し、閉会のことば、一同拝礼——である。その後、ナーマ浜の特設相撲場にて幼稚園児小中学生による奉納相撲がある。

略礼服装の神官役の久部良中学校長が奏上する祝詞は、次の通り。

祝詞(金刀比羅神社に祈る)

かけま かしこ ききぬきのこくことひらやま ちんざします こと ひら おおかみ たた  
 掛巻く畏与讃岐国琴平山に鎮座 金刀比羅大神と称

まつるおおものおかしおおかみあいの ますしらぬね おおかみそのしたがあまつれる  
 え奉大物主大神相殿に座白峯の大神其從閉奉礼留  
 よろずのかみたまを もここに まねきたてまつり  
 千万神霊平毛此所に招奉て与那国町の漁民船首  
 つつし みうやまいかしこみかしこみもうしもうさ かいろ あんぜん  
 一同伊慎美敬比畏美畏美毛白白白く海路の安全  
 のいくひ たらひ おおまえいやしひ  
 と大漁を願い今日能生日の足日に大前礼代のみてく  
 らに御酒御饌添氏尊る毛御心明仁所知食天御恵  
 みを つみごもりこいたてまつりうなぼら しやほいえ  
 美毛たれて御保護て乞奉利海原の潮八百ひ会も  
 のいくひ たらひ おおまえいやしひ  
 波風立ちて行く船の傾く事なく乗る身波いや健加  
 にやまいしき つつむ たいらかにやすらかに つき  
 仁病の与事なく恙平事なく平加仁安加仁港に着し  
 たまえともしもうす  
 め給閉登白須

金刀比羅神社祭の神官役は現在、慣例で、組合長の依頼で久部良中学校長が奉仕している。金刀比羅神社祭は沖縄の伝統的祭祀を伴わない祭典であり、次の新里宮とほぼ同様の式次第である。



写真6 上部の神祠が金刀比羅神社で、祭典では奉納相撲もある。

## Ⅵ 「新里宮」調査報告

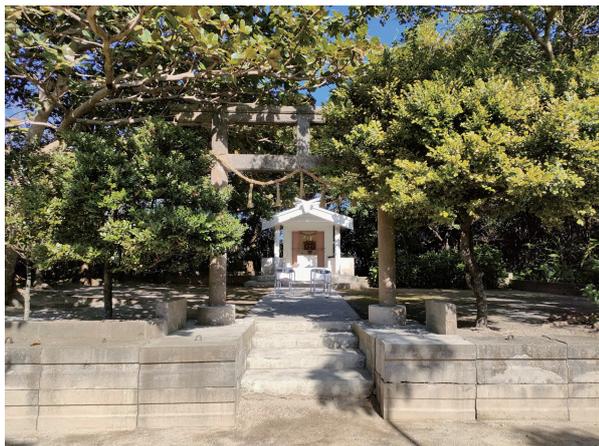


写真7 新里宮の正面

新里宮が鎮座する本部町は、沖縄国際海洋博覧会が本土復帰記念で昭和50年(1975)から51年(1976)に開催されたりゾート地である。北部の中核都市名護市から北へ20km離れている。新里宮の概容は次の通り。

神社名 新里宮  
 祭神 波上宮(熊野三神の伊弉冉尊、速玉男尊、事解男尊)、天照大神(?)

所在地 国頭郡本部町字新里

鎮座 昭和13年(1938)12月

例祭日 12月下旬

由緒 本部町具志堅集落から分村した新里には御嶽はなく、昭和12年(1937)の支那事変勃発後も具志堅の御嶽で出征兵士の武運長久を祈った。「御神体のわからないものに『お願』するのは意味がない。御神体のはっきりした所を祈ろう」と県社寺兵事課と相談、「日本の宗教根幹の神様は、伊勢神宮だから伊勢神宮を拝んだ方がためになる」ということで、天照大神を祭神とすることになり、波上宮から御鏡の御分霊をいただき、翌年12月遷座祭をおこなった。戦災で被災、戦後、3回ほど改築し現在の社殿となる<sup>注13</sup>。

新里宮は、現在、コンクリート社殿に神棚が安置され、波上宮の神札が祀られている。祭祀は区長が奉仕するが、波上宮に向いて、簡単な祭式、祓詞、祝詞などを学び、平服で奉仕している。鎮座の経緯から宮司役の区長は、天照大神に対しても祈念しているという。



写真8 新里宮で祝詞を奏上する区長と参列者

令和4年度(2022)の祭典は12月20日午後2時から斎行された。式次第は、一般の神社の祭典と同じで、修祓、齋主一拝、献饌、祝詞(神社拝詞)奏上、玉串奉奠、撤饌、齋主一拝、直会(ウサンレー)である。コロナ禍のため集落の代表が参列、齋主挨拶の後、直会として神饌と奉納品を参列者で分け合って散会した。

宮司の「代役」である区長が奏上する「神社拝詞」の一部は次の通りである。

神社拝詞  
 かけまくも畏き 新里宮の大前を拝み奉りて恐み  
 恐み白さく(中略) 誠の道に違ふことなく 負ひ  
 持つ業には励しめ給ひ(中略) 家門高く身健に世  
 のため人のために尽しめ給へと恐み恐み白す

## Ⅶ 終わりに——今後の研究課題——

以上4社を類型化すると、

①「神社」として建設されたが、沖縄の伝統的な祭祀



形態の中に、祝詞奏上が組み込まれた。⇒多良間神社

②沖繩の伝統的祭祀施設である御嶽で、祭祀の中に祝詞奏上が組み込まれた。⇒長浜ユークイ

③内地の職業的集団の信仰施設として、小祠が建設され、いわゆる「神社」と同様に祝詞奏上がおこなわれた。⇒金刀比羅神社

④分村の新しい鎮守として、昭和10年代という背景を踏まえて、「神社」という小祠を建設して、波上宮分霊（熊野三神）を祀り、祝詞奏上がおこなわれた。⇒新里宮

——の四つに分類できる。偶然だろうが、宮崎県出身者が多良間神社と金刀比羅神社の鎮座に大きくかかわった。昭和10年（1935）代という時代的背景もあつたか、祝詞奏上を前提としている。内地の職業的集団が建設した金刀比羅神社は、内地人のアイデンティティーとして神社祭祀がおこなわれたともいえる。

これらの祭祀施設は、法人として存続が保障されたものではなく、集落、職業的集団の意思によって存続させ、今に至る。伝統的な祭祀の継続は、個の「宗教」という枠を超えた地域共同体の祈りである。哲学的、宗教的意味を問わない祈りで、祈りをその地域集団以上に拡散させる意図はない。祭祀形態が如何様であっても、共同体の祈りこそが沖繩の伝統的祭祀の本質であることを、理解できる顕著な祭りではないかと思う。

ここで挙げた事例から判断すると、偉人に感謝して「神社」を建設し沖繩の伝統的な祭祀の中に挿入した祝詞奏上、御嶽祭祀への祝詞奏上追加、内地の職業的信仰の現地への移設による祝詞奏上、新集落への内地式の小祠の建設と導入された祝詞奏上——は、新しい祈りの形の導入・融和として、御嶽、集落に「祭祀再編」をもたらした。今日では、「祝詞奏上」が必然・必要不可欠のものとなっている。今後は、宜野座村・惣慶宮、名護

市・御佐喜宮、糸満市・白銀堂、西表島・白浜宮、沖繩市・泡瀬ビジュルなどをはじめとする「御嶽の神社化」の戦前と現在の比較調査が課題でもある。

明治以降、先の大戦による敗戦までは琉球処分による琉球・沖繩の日本化、戦時体制への突入など外的要因によって「祭祀再編」が否応もなく進められた（未成就。「模擬構造」化は進捗）。戦後も何らかの外的影響があつたとしても共同体など社会構造の変化という沖繩県の内的要因と、御嶽・拝所の消滅やノロクモイなどの神人の減少によって、伝統的祭祀の継続が困難になりつつある。御嶽・拝所で祝詞が奏上される新例もみられるという「祭祀再編」が進みつつある。これは、戦前とは違う新しい流れで、現代的な「祭祀再編」であり、今後の「祭祀再編」の行方を示唆しているのかもしれない。



写真10 御佐喜宮の初詣風景。名護市大中の「せんしり山」に鎮座。昭和4年（1929）、拝所をここに移してコンクリートの社殿を建設、平成の御代には神職資格を持った男性が一時奉仕、神前結婚式もあつたという。その頃からお守りや御朱印を授与するようになり、今日に至っている。



写真9 惣慶宮、国頭郡宜野座村惣慶の宜野座児童公園の一角（惣慶区事務所に隣接）に鎮座。昭和17年（1942）拝所に波上宮の分霊を合祀、今日でも毎年一月中旬の区新年会にあわせて祭典があり、波上宮の神職が奉仕している。

【注】

1. 神社本庁所蔵内務省文書、波上宮神社史編纂員 平成28年1月15日「破名城 波上宮誌 資料編」pp. 348-349、沖繩：波上宮
2. 「東京朝日新聞」明治35年1月27日付
3. 鳥越憲三郎 昭和40年3月30日『琉球宗教史の研究』pp. 655、東京：角川書店
4. 『庶務例規 第一号 沖繩県八重山島庁』（沖繩県公文書館所蔵 R00159072）
5. 多良間村史編集委員会 1993『多良間村史 第四巻 資料編3（民俗）』pp. 165-169、260、沖繩：多良間村
6. 伊良部村 1978『伊良部村史』pp. 1279-1658、沖繩：伊良部村役場
7. 山下邦雄 1933『国仲寛徒翁小伝』p. 49、福島：竹雅翁伝記刊行会
8. 平良市史編さん委員会 2003『平良市史 第十巻資料編8 戦前新聞集成 上』p. 745、沖繩：平良市教育委員会
9. 注6に同じp. 1658
10. 注7に同じp. 57
11. 酒井卯作編 柳田国男 2009『南島旅行見聞記 宮古（1921年1月31日～2月1日）』、東京：森話社
12. 安藤正 2016『年中行事の伝播と受容に係る一考察——沖繩県と那国島の金刀比羅祭を事例として——』『政治学研究論集』第44号、pp. 101-117、東京：明治大学大学院政治経済学研究所と松田良孝「どうなんの人たち 26～38 町制施行50年 第5部 笈田貞彦（1～13）」『八重山毎日新聞』1997年10月28日～11月9日）を参考にした。
13. 本部町字新里「お宮建立50周年記念座談会」昭和63年6月